

「官」と「民」



内海 善雄

〈前国際電気通信連合事務総局長〉

「平行な二本の直線は交わらない」という自明な公理でさえ、非ユークリッド幾何学では真ではないという。ましてや、人間世界に、絶対的に真なるものは一つも存在しない。長い海外生活から帰国してみて一番驚いたことは、「民」が善であり「官」が悪であるという考え方が支配的になり、異論を唱えるものが激減していることである。郵政民営化の議論は、郵政人にとつては、いかに偏ったものであったか説明の必要もない。自治体業務も民間委託されると喝采される。

そもそも「民」とは一体何を意味するのだろうか。「政府以外のもの」でもないだろうし、単純に「民間資本」や「会社組織」でもなさそうである。しかし、今や「民」とレッテルを貼られれば、全て善であり、一方「官」となると悪の権現であると受け取られている。

今、政府が開催する審議会の類は、全て財界の方々が委員をされ、彼らに「民」の正しい意見が期待されている。日本経済や産業界のあり方に関する議論ならいざ知らず、教育問題や、最近の親子関係などに関する事柄にまでも財界出身委員の「民」のご託宣が必要なのだろうか？

戦後民主主義は、まず言論の自由を保障し、また、財閥解体、そして戦争に協力したとされる財界人も追放することからスタートした。もちろん、GHQの意向を受けてのことであったが、人々は、あやまった戦争を行った背景が軍のみの独走であったとは考えなかつたため、このような占領政策を支持したのではなかつたのか。

「沈黙は金なり。」とか「雉も鳴かずば打たれまじ。」などの諺は、西欧にもある。どこの世界でも体制に異論を挟めば、あまり得をしない。しかし、一方「A fool laughs when others laugh.」と云う面白い諺もある。日本語では「尻馬に乗る。」と云うことであろうか。分別もなく他人の言動に同調して、軽はずみなことをすることを戒める諺である。

世の中が特定の意見で支配されて、異論を唱える者が少なくなる現象は、古今東西、文明や大国が減じる直前に必ず起きた事象である。自己を主張することを子供の頃から是として育つ西欧から見ると、今の日本は、どのように見えるのだろうか。